

「地方都市」に対する住民のイメージ構造

秋田大学 正 員 清水浩志郎

秋田大学 正 員 木村 一裕

秋田大学 学生員 ○木村 宣幸

1. はじめに

「地方都市」を対象とした研究は、人口規模などの規模論、通勤・通学流動による圏域論や位置論など多々ある。これは高度経済成長とともに生じた都市部への人口集中と、それに付随してみられる都市の盛衰現象が背景にあると考えられる。しかしながら経済が低成長期にはいると、地方都市から大都市圏への人口流出も漸増してきた。このために多くの地方都市は、経済の活性化など、成長期にはみられなかった課題に直面することとなった。

このような状況の中で、地方都市に在住する人々の意識の中に地域を活性化することで、住みよい都市を創造しようとする動きがみられるようになってきた。これは、住民の「豊かさ」への欲望など内面的な意識の向上に起因していると考えられる。また地方都市が持っている文化、伝統など独自の地域性が住民によって再認識されてきた。このように、住民の地方都市に対するイメージは徐々に変わりつつある。そのために「地方都市」を規模論や圏域論などから分析するときも、これらのことを認識したうえでの再定義が必要となろう。

以上の認識に基づき本報告では、「地方都市」の「すばらしさ」や「良さ」といったイメージ的な要素を考慮することによって、「地方都市」に対する住民のイメージ構造を評価しようとするものである。

2. 調査の概要

本報告では、住民の意識構造面からの分析にあたり、最初に地方都市に対するイメージ調査を行った。これは男子大学生10名、女子銀行員10名の計20名を対象とした調査で、地方都市から連想できる言葉をひとり5項目以上、自由にあげてもらう形式のものである。その結果として得られた156項目に対して、KJ法によって各項目の統合性を見だし、構造化した結果、「人間性」「都市観」「自然観」「都市施設」「交通」の5種類の言葉に代表されるグループに大別された。

次に、これら5グループの位置づけがどのような意味空間によって決定されているかを分析するために、Osgood et al. (1957)によって考案されたSD法 (semantic differential technique) を適用した。SD法は、尺度によって計られた人々の情緒的意味の認識枠の次元を把握し、その次元上にコンセプトを位置づける評定法のひとつである。この方法は言葉が持っている複合概念を概括するのに適しており、本報告のような個人の意識によって多種多様なイメージをもつ「地方都市」の構造分析には最適であると考えられる。

コンセプトとして、KJ法によって大別された5項目を用いた。また尺度の構成に関して、イメージ調査によって得た項目のうち複数回答されているものや、地方都市を説明するのに必要であると思われるものなど45項目を抽出した。さらに、それらの語を反対の意味を持つ言葉と対比させ、SD法のための調査票を作成した。

SD調査は秋田市に在住する19～22才の男女を対象に実施した。調査対象を若い人々に限定したのは、今後、地方都市の活力となる原動力は若い世代であり、彼らが「地方都市」をどう捉えているかを分析することは、「地方都市」の再定義に極めて重要な意味をもつと考えたためである。なお、配布数は150票、回収数は135票、回収率は90.0%であった。

3. 分析結果

SD調査の結果から、各尺度間の相関係数を求め、これをもとに因子分析を行った。因子数を決定する方法として、Osgood et al. が意味空間構成のために重要なものとして指摘しているE (評価)、P (能力) およびA (活動性) に着目し、この主要3因子について分析した。

表1はバリマックス回転後の因子負荷量を示したものである。表より第1因子は「量が少ないー量が多い」, 「水準が低いー水準が高い」などといった尺度が高い因子負荷量を持っていることから、これ

はE因子に相当しているといえよう。第Ⅱ因子で高い値をとっている尺度は‘質がよい－質が悪い’，‘きれいな－きたない’などで、これらはP因子を説明しているといえる。そして第Ⅲ因子では‘素朴な－洗練された’や‘保守的な－進歩的な’，‘消極的な－積極的な’といった活動性に関する尺度の因子負荷量が高くなっており、A因子の代理として考えられよう。つまり、「地方都市」を説明するのに、この3因子が重要な意味を持っていることがわかった。

次に、上記の因子分析によって選定されたE、PおよびAの主要3因子上で、おのおのコンセプトがどのような意味空間に位置づけられているかを把握するために、因子スコアの算定を行った。図1は各尺度の因子スコアを、おのおのの評定値について示したものである。ただし、因子スコアをより明確化するために、基準化した値を採用した。さらに、各コンセプトの距離関係に着目し、コンセプトを意味空間に位置づけることによって図2が得られた。ここで、A因子とP因子は平面上の縦軸と横軸で表されており、E因子は上下の高さで示されている。図2より「地方都市」を説明する5つのコンセプトのうち、「自然観」および「交通」の情緒的イメージが他のコンセプトと比較して極端に異端である。これらの異端は、図1に示されているように、「自然観」はE因子とP因子によって、「交通」はP因子とA因子によって特徴づけられている。つまり、「自然観」に関して住民は自然の豊かさや美しさなど、すばらしいイメージを持っていることと考えられる。しかし「交通」の場合には、その機能性が悪いこと、積極性に欠けることと評定していることから、交通

網整備の立ちおくれやサービス水準の低下など、悪いイメージとして捉えているものと示唆できよう。

4. むすび

本報告では、「地方都市」を再定義しようという認識に基づき、住民が持っている「地方都市」に対する情緒的な面からのイメージ構造を把握するために、SD法を適用し分析を試みた。その結果、これまで具体的に示されることがなかったイメージ構造が定量的、視覚的に明確になった。また、「地方都市」に対するイメージ論の確定のために、今後、性別によるイメージ構造の相違などについても分析をしていきたいと考えている。

<参考文献>

岩下 豊彦 「SD法によるイメージの測定」
川島書店

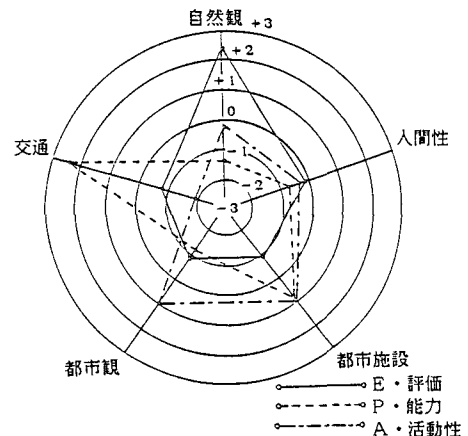


図1 コンセプト別因子スコア

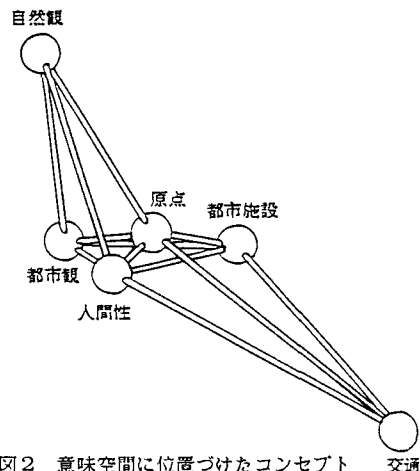


図2 意味空間に位置づけたコンセプト

表1 因子分析結果

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	h^2
量が少ない	0.68	-0.13	-0.03	0.48
水準が低い	0.67	-0.08	0.19	0.49
未整備な	0.55	-0.09	0.26	0.38
質がよい	0.35	-0.82	0.02	0.80
きれいな	0.37	-0.78	0.07	0.75
新鮮な	-0.06	-0.65	0.14	0.45
素朴な	0.10	-0.15	0.68	0.49
保守的な	0.11	-0.02	0.62	0.40
消極的な	0.17	-0.22	0.59	0.43
% of C	64.9	19.1	16.0	100